

献呈の辞

石田憲先生を送る

小林正弥・水島治郎

石田憲先生は令和七年三月三十一日、ご定年により千葉大学を退職され、同年四月一日に名誉教授となられました。先生のご退職を記念する『法学論集』特集号を刊行するにあたり、先生のご略歴とご業績を振り返るとともに、感謝の言葉を申し上げたいと思います。

石田先生は、平成四年二月に東京大学大学院法学政治学研究科博士課程を修了し、博士（法学）の学位を取得されました。平成九年一〇月に千葉大学法経学部助教授に採用され、平成一二年一〇月法経学部教授に昇任されました。平成二〇年四月大学院人文社会科学研究所教授に配置換のち、平成二三年四月法経学部教授に配置換、そして平成二六年四月法経学部教授に配置換、平成二九年四月同大学院社会科学研究院教授に配置換となり、その職にあつてご定年を迎えられました。

次に、石田先生の教育研究におけるご業績を振り返ってみたいと思います。

石田先生は法政経学部および大学院人文公共学府において、一貫して国際政治関連科目を講じてこられました。アカデミックな香りあふれる講義を受けた学生・院生のなかからは、後に研究者として羽ばたく人が多く出ています。本記念号に寄稿されている学外の先生方も、講義その他の機会に石田先生より薫陶を受けた方々です。

そして研究面については、先生は日本語による単著書六点をはじめ、英語、イタリア語を含めた多数の学問的発信を続けてこられました。英語の単著書も一点刊行しておられます。

石田先生の研究の柱は、第一はイタリアを軸とする国際政治研究です。代表作としてファシスト期イタリアの外交政策を緻密に検討した『地中海新ローマ帝国への道』、およびイタリアと日本の関係を軸に日独伊三国同盟の歴史的位置づけを明らかにした『日独伊三国同盟の起源』、『Japan, Italy and the Road to the Tripartite Alliance』などが挙げられます。第二の柱は、戦後体制の形成にかかる研究です。特に日本国憲法成立の問題を念頭に置きつつ、イタリア・ドイツ・日本という敗戦国三国が直面した、戦後体制の樹立と民主主義の定着という重大な課題にどう各国が対応したのか、いかなる成果と限界があったのかを分析しておられ、『敗戦から憲法へ』、『戦後憲法を作った人々』などがそれにあたります。第三の柱は民主主義の「深化」をめぐる研究です。戦時中から戦後にかけて、敗戦国がいかに民主主義を実質化するために苦闘したのかという問題意識を背景に、『戦争を越える民主主義』をはじめ問題提起的な著書、並びに論文を刊行しておられ、その射程は現代にまで及びます。先生の研究は、各国の一次資料を丁寧に読み解いて歴史の姿を浮かび上がらせる地道な研究を出発点としつつ、二一世紀の民主主義の行方まで見通す幅広いパースペクティブによって貫かれており、歴史学と政治学の双方のデイシプリンを踏まえて統合的に議論を展開させていくものであり、まさに他の追隨を許さない独自の国際政治史学を打ち立てたといわざるをえません。

また石田先生は、学内行政においては、平成二一―二二年度に大学院人文社会科学研究所長を務めたことをはじめ、平成二七年度には法政経学部入試委員長、平成二九年度には大学院人文公共学府博士後期課程入試委員長など学部、大学院、全学の要職を歴任されました。特に人文社会科学研究科長在任時に、大学院改革の要請に応

えるべく、ワーキンググループを設置して改組の可能性を本格的に検討し、学際的・実践的な大学院教育のビジョンを描いたことは、後の大学院人文公共学府への改組を準備するものとなりました。また政治学講座においては、長年にわたり講座主任を務められ、千葉大学における政治学の研究・教育の発展に多大な貢献をされました。

さらに石田先生は、学外においても広く学会活動、社会貢献に従事し、顕著な成果を上げてこられました。国際政治学会において書評担当副主任を務めたほか、社会活動では日本記者クラブにおいて「戦後七〇年語る・問う」⑬イタリアの戦後処理二〇一五・六・四」の講演を行い、NHKファミリーヒストリー二〇一五年九月一日のコメントや、第二六回憲法記念行事シンポジウム「戦後を支えてきたものは？憲法施行七〇年目の立憲主義／何を守りめざすのか」（日本弁護士連合会他主催、弁護士会館、二〇一七年五月二七日）におけるパネルディスカッションでのコメントを引き受けておられます。また世界政治研究会を継続的に主宰され、大学の枠を超えて多様な研究者が研究報告と議論を行う場を設けてきたことも、アカデミズムにおける貢献活動として特筆すべきことといえましょう。

このように石田先生は、千葉大学における教育研究、学内行政、学界・社会活動の多面にわたり多大な貢献をされてきました。普段は優しく、時に厳しさをみせる石田先生の静かな眼差しがあつてこそ、私たちは安心して教育と研究に励むことができました。改めて感謝申し上げますとともに、先生の今後の一層のご活躍を祈念申し上げます。